サポートを必要としている。③民生委員等が行政や専門職に求めていることは個人情報の取扱に関するルール作りと、役割分担の明確化である。

2．研究方法

1）研修会参加者へのアンケート「こんな西区になったらいいな」調査

対象：「西区高齢者ちょこっとネットワーク研修会」最終回の参加者 80 名

方法：自記式アンケート調査（集合調査）

時期：平成 23 年 3 月

2）「西区高齢者ちょこっとネットワーク研修会」3 年間の評価のための調査

対象：「西区高齢者ちょこっとネットワーク研修会」参加者 6 名

方法：個別インタビュー調査

時期：平成 23 年 3 月

3）3 年間の「西区高齢者ちょこっとネットワーク研修会」活動状況に関するまとめ

対象：3 年間の「西区高齢者ちょこっとネットワーク研修会」参加者と活動内容

方法：35 分間の DVD を製作

時期：平成 23 年 3 月

3．倫理的配慮

本研究は、甲南女子大学研究倫理委員会の承認を得て実施した。

研究対象者には研究の主旨や個人情報保護について、口頭で説明と依頼を行い、同意を得た。なお、アンケート調査については、アンケートの回収をもって同意を得たものとした。

第３章　堺市西区の見守り活動の現状

１．民生委員等の調査から見えてきたこと

本研究の対象地区は政令指定都市の中の１つの区である。農村部などにみられる従来からの地縁的つながりの中での見守りは、ほとんど期待できないことが都市部における見守りの特徴であり、課題でもある。従って、研修会や交流会等の場を活用して効果的な地域見守りネットワーク活動の促進が求められている。本研究の平成20年度調査結果をもとに民生委員等が行っている見守りに関する実態を明らかにした。

1)地区に対する愛着等の実態

調査の対象は「認知症高齢者への対応を考える研修会」に参加した118名である。西区の高齢者の状況では、担当地区の高齢化率は21%を超え、独居率においては25%と四分の一を占めるという状況下にある。地域住民のほとんどが顔見知りの関係ではなく、他者には無関心であっても生活が成り立つという都市部において、漠然と見守りの必要性を説いても効果的ではない。地域に対する認識状況を知ることが見守りの手がかりになると考え、校区の人の信頼関係形成について質問した。その結果は、「信頼関係は築きやすい・まあ築きやすい」56.2%と半数程度は築きやすいと捉えているものの、否定的な考え方をしている人もいる。また、校区の人は「人の役に立とうと思っているか」についても、「そう思う・まあ思う」53.4%は肯定しているが、否定的な人もいる。しかし、地区への愛着では87.7%が愛着を感じていると回答している。

2)見守り活動

研修会参加者の背景は5名を除き、地区の役職を兼ねており、見守り対象者がいる人は60.3%と過半数を占めた。見守り対象者の内訳は、回答のあった43名では、一人暮らし93.0%、高齢者のみの世帯48.8%であり、また、見守り対象者の状態は、健康状態に問題のある世帯68.6%、認知症高齢者48.6%、寝たきり高齢者22.9%などと健康状態に問題のある世帯が主であった。しかし、経済的な問題をかかえた世帯20.0%、家庭環境に問題がある世帯17.1%であり、経済・家庭環境の問題へも対応していた。

見守り方法は訪問88.6%が最も多かったが、家の外からの見守り18.2%、電話13.6%のほか、近隣等と協働で行っている11.4%もあった。訪問での見守り頻度は月1回程度60.0%が最も多く、次いで1週間に1回程度36.0%であった。また、見守りに至った経緯では、一人暮らしや75歳以上の高齢世帯の実態調査52.8%、次いで近隣からの相談25.0%であり、本人からの相談は16.7%、別居家族等からは11.1%であった。

見守り時に留意していることの主な内容は、健康状態89.5%、受診状況34.2%、認知症の程度31.6%であった。見守りの基準では、基準なしと無回答を合わせると84.9%であり、基準を決めているのは15.1%に過ぎなかった。しかもその基準は、世帯状況や年齢、要介護度等であり、統一されたものではなかった。

見守りの活動の効果は、困ったことがあれば相談するようになった63.3%、困っている人の

援助につながった40.0%、事例の早期発見につながった33.3%であった。見守り活動で困難な理由は、ひとりでの見守りは荷が重い、情報が得られないがそれぞれ39.5%、多忙で見守りができにくい34.2%であった。

3)孤独死について

孤独死という言葉を聞いたことがあると回答したのは87.7%、担当地区で孤独死の危険性が高いと思われる人が「いる」と回答したのは26.0%、「いない」は32.9%、「わからない・無回答」は41.1%であった。孤独死の危険性が高いと判断する根拠では、近所付き合いがない52.4%、外出しない47.6%、人の出入りがない23.8%、見守りや援助を拒否19.1%、健康状態がよくない14.3%であった。

担当地区での孤独死（過去を含む）の有無では、「あり」23.3%であり、「見守りネットワークで孤独死が予防できると思う」は57.6%であった。孤独死の予防のために地域でできることでは、近所や地域での日常的な交流・声かけの必要性をあげており、連絡方法は訪問より、電話連絡がよいと回答していた。また、情報提供への考え方に差があり、問題を共有できていないことを指摘していた。さらに、孤独死を予防するために行政や専門職に求める役割では、情報の提供と、情報の取り扱いのルールづくり、見守りに対してもっと行政レベルでの具体策を考えてほしいなどの意見があった。

4)地区の見守りに関する課題

西区の高齢者見守りに関する課題は、アンケート調査の自由記載の集計から次の5点にまとめられた。①情報が得られにくい　②見守りの民生委員等に負担感がある　③根拠のある見守り基準が必要　④見守りが困難な状況に対しては地域の人の協力を得ることと、ケアマネジャーや行政との連携を求めている　⑤見守りが困難な状況として高齢者本人の拒否がある。

さらに、民生委員等の見守り組織メンバーへのグループインタビュー（5グループ、対象者10名）結果では、①担当地区では孤独死はないと自負している反面、連携がとれていない団地では孤独死が起こりうるととらえている。②見守りの対象者は、人に頼ろうとしない、つながりを拒否するなど交流に問題のある人。③見守りのテクニックは、対象者の気持ちに立ち入りしすぎない程度に見守り、機会を設けて声をかけ、既存のサービスを使って安否確認やニーズに応えるなどの支援の積み重ねが信頼関係を築くことにつながる。④課題は支援や介入を拒否されること、個人情報が得にくいこと、やる気のある担い手がいないこと、価値観の多様性、民生委員のイメージが生活保護に結びつき受入を困難にしているなどであった。

また、見守り組織づくりを支援してきた地域包括支援センター等の専門職（12名）へのインタビュー調査からみえてきた見守りの課題は①情報が共有できない。②情報を得てもその後の介入が困難なことが多い。③少なくとも家族等と共通認識をもつことが必要である。④行政との役割分担が明確ではなく、独居等の事例では孤独死防止に限界があると感じていた。

2．見守りチェックリストの検討

研究2年目の調査では数回にわたって見守りチェックシートの試行を行い、項目等の厳選や有

効性について検討を重ねた。諸般の事情により最終的な調査項目の完成までは至らなかったものの、民生委員等が行う見守り担当者として心得ておくべき視点が明らかになった。

①見守りで大切な視点は、何となくいつもと違う何か変であると「気づく力」と、「少しのお節介」が必要である。②見守りには対象者との信頼関係が必要であり、関係性の取り方と、聞き方のコツが必要であるが、それは決して難しいことではない。③自分にできることを無理のない範囲で行い、一人で頑張りすぎない。 ④屋外からみて分かることと、家の中まで入らなければ分からないことなどがあり、その区別を知っておく。⑤見守りは決して監視になってはいけないことを常に意識すること。そのためには自分や自分の家族に置き換えて考えるのも一案である。⑥プライバシーの尊重は大切であるが、人の命がかかっている可能性への気づきも同様に大切である。⑦専門的なことは専門職や行政に任せ、常識の範囲で対応可能なことと、住民の立場での限界があることを知って活動する。⑧チェックシートは見守りのきっかけづくりに有効である。⑨見守りで最も大切なことは、人にはそれぞれの生き方や価値観があり、それを認めながら暮らし続けられるように共に考える姿勢をもつこと。以上の 9 項目が見守りで重要なことである。

3．地域見守り組織の本年度の活動状況

1）地域見守り組織における本年度の取り組み

昨年度に引き続き虐待防止ネットワーク事務局と高齢者虐待防止ネットワーク企画運営委員会の活動を推進してきた。各メンバー数は以下のとおりである。

a：高齢者虐待防止ネットワーク事務局（8 名）

在宅介護支援センター：3 名

グループホーム職員　：2 名（管理者、看護師）

地域包括支援センター：3 名（所長 1、社会福祉士 1、主任介護支援相談員 1）

b：高齢者虐待防止ネットワーク企画運営委員会（20 名）

在宅介護支援センター、医療機関、居宅介護支援事業所、各介護保険サービス事業所（訪問介護、訪問看護、通所介護、老人福祉施設、老人保健施設、グループホーム）、民生委員、社会福祉協議会、各行政機関（地域福祉課、保健センター）

2）見守り組織育成に向けた取り組み

(1)取り組み状況

堺市西区では,住み慣れた地域で高齢者が安心して暮らせるまちづくりを目指して、支援者の更なるスキルアップを図るための取り組みをすすめてきた。具体的には研修会を通してネットワークを構築することを目的にして、これまで第一弾から第三弾の研修会を企画・開催してきた。第一弾は高齢者虐待をテーマに、第二弾は認知症高齢者を支えるためのネットワークづくり、第三弾は社会保障の知識を深める会を開催し、さまざまな立場や職種の方々と共に研修を進めてきた。

研修会の対象は「高齢者を支援する住民の皆様」であり、具体的には医師会、民生委員、

校区福祉委員、自治会、介護者家族、ボランティア、医療機関、居宅介護支援事務所、各介護保険サービス事業所（訪問介護、訪問看護、通所介護、老人福祉施設、老人保健施設、グループホーム）、社会福祉協議会、各行政機関、在宅介護支援センターなどの職員や、研修への参加の意志表明をされた住民の皆様である。対象人数は1回当たり約100人程度として、その人達と共に、高齢者を抱える社会的な課題やネットワークの必要性について学んできた。研修会の企画の担当は「堺市西区高齢者ちょこっとネット企画委員会」であり、介護保険事業者の代表と地域包括支援センターの職員を加えた総勢28名である。研修に合わせて適宜企画会議をもち、さらに研修会実施後には文字と写真で研修会の様子について詳細に説明を加えた**「ちょこネット便り」**を発行している。

平成22年度は「高齢者見守りネットワークづくり～高齢者に関する社会保障を知ろう～」をテーマにしたキーコーディネーター養成研修（3回シリーズ）と、市民向け研修「高齢者が安心できるまち、西区を目指して～孤立しがちな高齢者のために,何ができますか～」を加えて合計4回の研修会を開催した。今年度は当初計画の最終年度ということでもあり、平成23年3月24日の研修最終会では「これまでの歩みを振り返って」と題して、3年間の活動の概要を手作り製作したDVDで振り返り、これからの西区のネットワークのあり方を考え、平成23年度に向けての課題を明らかにした。

（2）スタッフ

堺市西区高齢者ちょこっとネット企画委員会のメンバーは、総勢28人であり、その内訳は通所介護、訪問介護、医療機関、特別養護老人ホーム、グループホーム、在宅介護支援センター等の代表の他、地域福祉課、保健センター、社会福祉協議会等の代表等で構成している。事務局は地域包括支援センターの職員、在宅介護支援センターやグループホーム等の代表者が担っている。

（3）研修内容

高齢者見守りネットワーク研修会の具体的な内容と参加者数を表2に示した。なお、市民向け研修会の対象は、前年度までの参加者である堺市西区内の市民、民生委員、校区福祉委員、自治会、婦人会、老人会、介護者家族の会、ボランティア、介護保険関連事業所・施設、医師会、病院関係、社会福祉協議会、行政、堺市内の地域包括支援センター、在宅介護支援センター等の職員に加えて、配食弁当業、警備会社、スーパー、消防署、司法書士会などに広く呼びかけた。

a.市民向け研修会：

孤独死についての先駆的な研究者である中部学院大学の新井康友氏を講師に迎えて、孤独死に至りやすい状況から孤独死の実態、孤独死を防ぐためにはどのように取り組めばいいかなどについて調査データを引用しながら詳しく説明していただいた。印象に残ったのは「一人で死ぬことが問題ではない。また、死亡してから発見するまでの日数も問題ではない。孤独死する以前の生活状態が問題である」という言葉であ

る。生前の人との関わりや、生活を豊かにするためには、地域の人々との関わりが一番大切という視点から,全国各地の自治会や民生委員活動の紹介、校区福祉委員による見守り活動、住民全体で独居世帯の異常をいち早く察知する仕組み作りを行っている地域などの紹介があり、今後の西区のネットワークづくりに関する示唆を得ることにつながった。

研修の後半はシンポジウムが開催され、シンポジストは西区内で高齢者に関わっている民生委員、医療機関の医師、消防士、民間の清掃業者（株式会社メモリーズ）、地域包括支援センター（社会福祉士）の5名である。シンポジウムでは孤独になりがちな高齢者への関わりの困難さや、ゴミ屋敷になってしまった高齢者宅の清掃の実態、それを防ぐための取り組み等についてそれぞれの立場からの発言を求め、成功裏の内に終了することができた。

表2　平成22年度高齢者見守りネットワーク研修会の概要

回数	テーマ・講師	参加者
市民向け 研修 22/9/9	「高齢者が安心できるまち、西区を目指して ～孤立しがちな高齢者のために、何ができますか～」 新井康友氏（中部学院大学 人間福祉学部 健康福祉学科）	280人
	シリーズ：高齢者見守りネットワークづくり ～高齢者に関する社会保障を知ろう～	
第1回 22/11/25	「社会保障を知ろう　選択研修会　パート1」	76人
第2回 23/1/27	「社会保障を知ろう　選択研修会　パート2」	86人
第3回 23/3/24	「これまでの歩みを振り返って ～研修会を振り返り、西区のネットワークを考えよう～」	80人

b.キーコーディネーター養成研修

第1回「社会保障を知ろう　選択研修会パート1」

第2回「社会保障を知ろう　選択研修会パート2」

研修内容は、日常の仕事・活動に活かせる内容を取り上げて、出席者は個々のレベルに合わせて、参加する研修内容を自らが選択する方式の選択型研修とした。その結果、高齢者を支えていく中で、支援者側の不安や、課題を抱えている方々の声を受け止める場、課題対応を話し合う場、専門職と地域で活動されている方々とを相互につなげる場となっており、好評であった。今回だけに終わらずこのような研修を今後も続けて欲しいという声が寄せられている。

第3回：堺市西区高齢者ちょこっとネットワーク研修会では足かけ4年、高齢者見守りネットワークづくりに向けての研修会を15回、市民向け啓発研修会3回の合

計 18 回の研修会を開催してきた。今回はこれまでの連続研修会の集大成として位置づけ、企画委員が手作り製作した「堺市西区高齢者ちょこっとネットワーク研修会の歩み（DVD：35 分間）」を視聴しながら参加者と共にこれまでの活動を振り返り，“どんな西区になってほしいか”、また、“高齢者を支えるためにできること”などを話し合い、ネットワークの更なる発展を目指した課題や希望を話し合った。

(4)参加状況

研修の各回の参加者数を表 2 に示した。平成 22 年度中の研修会参加者数は延べ 522 名であった。

4．本研究における研修

1)本年度に実施した研修（実施年月、対象、人数）

①実施回数：１回の市民向け啓発研修１回とキーコーディネーター研修３回の合計４回である。

②対象者：地域見守り組織メンバー、専門職等約 100 人

③スタッフ：堺市西区高齢者ちょこっとネット企画委員会メンバー総勢 28 人

④内容：研修テーマと講師の概要は表２のとおりである。

⑤参加状況：参加者数は表２のとおりである。

⑥評価：毎回の研修の終了時にアンケートを実施している。その内容は概ね良好である。なお、研修会実施後には文書と写真で構成した研修会の概要と、参加者のアンケートの集計結果を加えた**「ちょこネット便り」**を毎回発行している。この機関誌の発行は広く関係者への情報伝達の役割を果たしており、また、当日の欠席者にとっては欠席時の研修内容について情報が得られ、研修会の効果向上に有効に機能していたと評価できる。

5．研修参加者が考えるこれからの西区

本年度の最終回の研修会は、シリーズ:高齢者見守りネットワークづくり～高齢者に関する社会保障を知ろう～であり、第３回目のテーマは「これまでの歩みを振り返って～研修会を振り返り、西区のネットワークを考えよう～」であった。参加者を対象に実施したアンケート調査「こんな西区になったらいいな」から、研修参加者が描く地域のイメージを明らかにした。その結果は表 3 のとおりである。なお、研修会参加者数は 80 名であり、アンケート回収数は 52 名（回収率 65.0%）、「こんな西区になったらいいな」の有効回答数は 49 名（アンケート回収数に占める割合 94.2%）であった。アンケート内容は他にも「ちょこっとできるシート」があり、有効回答数は 46 名（アンケート回収数に占める割合 88.5%）であったが、詳細は省略する。

表３　高齢者見守りネットワーク研修会のアンケート結果

「こんな西区になったらいいな」集計結果

＜連携・つながり・関わり＞

・住み続ける人が元気でいられるために、十分な関わりをしてもらう。

・市民が相談するときにどこに行ってもつながっている西区。

・行政、自治会、民生委員など横のつながりがもっとほしい。

・横のつながりができ、緊急時に備え、人間関係の重要性が実感できる。

・民生委員や自治会と行政機関をはじめ関係機関が連携して,高齢者や障害者の支援ができる地域。

・医療機関と連携する必要がある。

・住民、西区、事業者がツーカーで通じるくらいのネットワークがほしい。

・ケアマネジャーと民生委員との結びつきを強化したい。

・行事に参加→顔見知り→ネットワーク、顔見知り→コミュニケーション→ネットワーク
コミュニケーション→信頼関係ができる。

・西区の中で身近なことから大きな輪にしたい。できるだけ地域とつながり、どんな行事にも参加する。

・医療機関と民生委員の連携がとれるようになる。

・地域と役所、民生委員、各種委員が一体となって仲良く活動できる西区。

・向こう三軒両隣だけでなく組織、自治会でイベントなどを通じて一体的な活動ができる地域となること。参加を渋る人に対しては、参加賞や歳末助け合い金等を持って何回も行く。

・顔の見える企画(グループワークや地域発表など)。

＜顔見知り・声をかけ合う・助け合う・見守る＞

・皆が顔見知りの町。

・隣組の方々と仲良くし、いつも心配し合い、助け合える人間関係づくりを努力していきたい。そんな西区。

・気軽に隣近所の方と話ができ、もし異変や困ったことがあれば連絡できるような町。

・向こう三軒両隣

・自分たちだけでなく、地域全体で見守っていける形ができる。

・子どもから高齢者まで皆が声をかけ合える関係ができる町。

・顔見知りになれるきっかけ作り、朝の挨拶をはじめ色々な年齢層の方に声かけして緊急時に備えて信頼を築いていける町。

・地域に出てこれない人を支え合える町。

・笑顔で暮らせる町づくりができたらよい。

・どこに誰が住んでいて,どういう人がいるのか分からないのでなく、顔が見える近所でのつながり。

・関係機関と住民(高齢者から子どもまで)が助け合える堺全体の仕組み作り。

・子どもから高齢者まで声をかけ合える町。

・お互いが何となく顔だけでも見覚えのある関係をつけられる町。

・地域の住民の皆が助け合う意識を高める。

・町全体が一緒に動ける。民生委員、子どもも高齢者も皆がみてくれる、一人ではない。

・様々な分野の方、また地域の方が密になり、高齢者の方を理解し、全域で支え合えるように。

・声かけ運動。

＜場づくり＞

・「ふれあいの場」がもっと小地域単位にあれば気軽に参加でき、もう少しつながりができるのでは。

・普段から隣近所の付き合いを心がけ、小地域ネットワークを活かして段々と範囲を広げ、自治会に気軽に集え、情報交換ができる場所を増やしてほしい。

・民生委員や専門職との交流の場、自由に和気藹々としゃべれる場所がほしい。

・皆で考える場がほしい。

・校区の地域ネットワークとして校区福祉委員と地域の医師とのコミュニケーションの場があればいい。

・地域に皆が話しができる場所があるといい。

＜生活意欲＞

・自分自身も意欲を持って生活できること。

・権利と義務を弁えて生活していく方々が増えること。

・高齢者、子ども、障害をもった方でも見守りを受けるだけでなく、何かを地域に発信し、共に喜び合える地域。お互いのやる気、できることを引き出し、笑顔のあふれる町になったらよい。

＜環境整備＞

・医療機関の整備（医師との交流、往診医、小児科医・産婦人科医）。

・公園・河川などの環境の改善。

・子どもの遊び場が沢山ある町。

・学校が地域に開放されている町。

・老人施設の充実（希望に即応できる態勢）。

・医療機関の充実。

・情報の強化により安心、安全に暮らせる町。

・防災無線的なものがあったらいい。

＜人材育成＞

・生活を見守るスタッフの育成（民生委員だけでなくサポーターの育成、専門家の交流、福祉分野で働く公務員増など）。

・牽引者を作ろう（研修：テーマ分け→より深く→他の人に広める）。

・ボランティアが活動している町。

・高齢者見守りネットワーク作りに向けての研修をしていき、安心して暮らしていける町づくり。

・高齢者見守りネットワークの研修をもっと続けていき、各団体、各地域の人と交流し、自分の今後の活動に活かしたい。色々な立場、組織とのネットワークづくりができるので、自由に会話し、情報を得ることになるので。

・ちょこっとネットワーク研修を継続してほしい。

・知恵、意見を出し合う場や研修がまだ必要、具体性を帯びたシステム作りが絵に描いた餅にならない注意が必要。

・民生委員の活動をもう少し若い世代（40～50 歳代）に知ってもらい、時々でもよいので共に高齢者に対する思いやりができる西区になれば素晴らしい。

・学校教師のレベルアップ

＜PR＞

・皆が意識を持てるようにしっかり宣伝する

・地域包括支援センターが何をしているのか、どこに相談したらよいのかを、地域の活動やイベント等に全く参加して

いない人に知ってもらうにはどうしたらよいのかを考え、もっとアピールをする。

＜地域づくり＞

・地域づくり

・民生委員と老人会の方がより仲良く活動できたらよいと思う。

・いきいきサロンに沢山の高齢者の方が参加できたらよい。

・災害時に皆で助け合えるような仲のよい近隣に。

・西区全体として幅のある活動、各校区単位が原点であっても全校区で抱えている問題でもある。

・「お元気ですか訪問」があるが、ボランティア部34名で校区の独居の方にいきいきサロンの案内を持っていくようにして、月1回顔を見ることができるのでいいのかなあと思う。

・民生委員のできる関係を続けていく。

・ボランティアの方が楽しく動けるような西区になったらいい。

・外に出た時、誰とでも話のできる,挨拶できる町。子どもの見守り等を通して子どもとの関係から親との関係に」なっていくことはすごくいいと思う。高齢者が区内にどれだけいらっしゃるかもう少しはっきり分かるような町。

・西区として全体の集まり(福祉等)。

・単一町会会合に参加して町内会の様子を知ることが必要と思う。

・皆が笑顔になれるような町。

・当地域は高齢者問題が最大の注目点になると思う。

・住民相互の適度な関わりがある地域。

・地域全体が弱者や障害者に対する意識が高まり、子どもや高齢者にも温かく声かけができ,地域住民すべてが家族になれるような西区。

・近隣の人たちが独居高齢者に少し気を使ってもらえる。

・非常時に地域力が発揮できるような日々の活動基盤ができればよい(自治会加入率が70%以上になればよい)。

・近隣の人だけでもよくわかり合える人間関係を保ちたい。入って行きにくい家もある。

・近所の人に常に関心を持っている人々が多い町になってほしい。思いやりを形にできる人々が多い町。

・近所の家族が寄り合って会食できる地域。

・震災時にもすぐ安否確認できる地域。

・いろいろなことが話し合える地域、オープンな社会。

・独居生活者の見守りなど、地域で取り組めればよい。

＜行政サービス＞

・認知症者の保護が最大限できる西区。

・老々介護の仕事と現状を把握でき、対応できる西区。

・必要な時に必要な人への情報提供ができる西区。

・要介護認定が自然な形でできれば肩を張らずに(サービスを)受けることができるのではないか。

・役所のパンフレット・冊子等はもっと分かりやすい言葉を使って説明する。

・向こう三軒両隣システム復活の啓発をして自治会等のネットを活用、細かい問題別対応の窓口を組織化すると同時に、情報の枠を広げていく。法、規定の緩和が必要。

・困りごとがある際にどこに相談すればよいのか等を的確にできればよいのではないか。

・もっと気軽に相談ができる町。

第４章　本年度および３年間のまとめ

研究 3 年目の研究目的は、2 年目の調査を基に修正した見守り基準を用い、調査地区内の見守り組織構成員等に研修を実施し、地域別及び見守り組織別の見守り基準を作成すること。併せて見守り組織及び関係専門職と 3 年間の研修内容を検討し、見守り組織育成プログラムを作成し、提案することである。

西区では研究目的の後半の守り組織育成プログラムについて重点的に取り組んだので、政令指定都市等の地域のつながりが希薄である都市部における見守り組織育成のための研修プログラムのあり方について考察を加えたい。なお、西区での研修内容は二つに大別され、一つはキーコーディネーター育成を目指しての研修であり、もう一つは市民全体を対象にした啓発研修である。また、研修の目的を次の 3 点とした。①参加者のスキルアップ　②顔の見える関係づくり　③専門職と地域住民との橋渡しをすること。

１．キーコーディネーター育成のための研修

1）研修内容

初年度の研修では、「高齢者虐待の発見と予防」、「危機介入法と介入段階」「身体的虐待の実例と対処法」「セルフネグレクト（引きこもり）高齢者の早期発見・見守り組織のあり方」などを組み込み、知識の集積を狙った企画とした。また、「支援体制と連携」では支援体制や具体的な連携事例を提示して今後の活動に活かせると実感できた人や、新たな課題を見つけられた方などがあり、参加者は研修当初の頃より確実に知識も増え、視点も広く変化しつつあることが実感できている。さらに、高齢者虐待については、深く関われば関わるほど法律の壁に直面し、悩むことが多くなる。そこで、高齢者虐待に関するアドバイザーとして活躍している弁護士を講師に迎えて、これまでの経験や事例をもとに、「高齢者虐待に関する法律の理解」と題して高齢者虐待に対する法律家としての視点や、法律的解釈などについて話していただいた。講演に先立ち、「成年後見制度について」の DVD も視聴する時間を設けた。この DVD は前回の研修会時にも視聴したものであったが、今回の研修内容がより深められることを期待しての企画であった。

研究 2 年目の研修内容は、研究対象地域が都市部であることに鑑み、消費者被害や介護問題も深刻化していることへの対処策を考慮して企画された。これらの背景のひとつには「認知症」の存在があり、認知症を正しく理解することが予防につながると考えられる。そこで、第二弾の研修テーマとして認知症高齢者問題を取り上げ、サブテーマを「高齢者の特性を理解することから始める」とした。

研究継続 3 年目である本年度の研修テーマは、「社会資源・社会保障を知ろう」とした。そして、研修内容は最初の 2 回は選択制にして関心のあるセッションに参加する形式をとった。最終回は「これまでの歩みを振り返って～研修会を振り返り、西区のネットワークを考えよう～」と題して、これまでを振り返り、まとめとした。

2）研修会の編成と開催頻度

キーコーディネーター研修は、1 年間に 1 シリーズの開催として、1 シリーズの研修回数は 6

回としている。初年度と二年目は1シリーズ6回、2年間で合計12回開催し、三年目は3回、合計15回の研修会を実施してきた。1年間の研修回数が6回であることに関しては、一人の人が継続して受講するのは多すぎる回数ではないかという意見もあったが、スキルアップという目的の達成には必要な回数であること、また、連携の第一歩は参加者が相互にお互いの顔を覚えることであり、そのためにも必要な回数であったと評価できる。

次に、2カ月に1回という開催頻度は、2カ月に1回地域の人や関係機関が顔を合わすことが、ネットワーク形成のきっかけになると考えての開催頻度であった。参加者同士の交流を深めるには1カ月の1回という案もあるが、継続参加を条件としたためにそれらの目的達成のために最大限譲歩しての開催回数・頻度であると考える。都市部の住民間のつながりが少ない地域では、既存の組織や顔見知りのつながりを越えてネットワークを形成することが重要な課題となる。そのためには、メンバー自身が主体的に取り組むという動機づけが大きな意味を持つ。講演の講師がいかに高名であったとしても、地域のネットワークに活かせないようでは講演会の意味が半減してしまう。そうならないためにも、講演のみで終了してしまうのではなく、その講演会の内容をふまえたグループワークをセットで企画している。このように研修内容を自分の地域にどのように活かすかを考えるステップを意図的に組み込み、そのことを通して、ネットワーク形成や、参加者同士が協力して何かを作り上げていくという意識高揚につながっていたことが評価できる。

3)グループ編成

グループワークでのメンバー編成は、職種を混合した状態でのグループワークであったり、校区ごとの編成にして実際の校区を意識してのネットワークづくりであったりとさまざまに工夫してきた。このことは、参加者間に意識や理解の差があり、有効な討議にならないのではないかといった当初の危惧を見事に払拭した。グループワーク後のアンケート結果でも活発な意見が出ていたという意見が90%越えていたことがその有効性を証明している。特に研修シリーズの後半は在宅介護支援センターを中心にした校区ごとのグループワーク編成で進められた。地域のつながりを更に強化し、自主ネットワークへの意識づけが段々と高まってきたことが窺える。さらに参加者は積極的に発言し、活発な意見交換され、「さまざまな立場や考えを共有することができてよかった」という意見とともに、「日頃の業務に照らしてどのように支援していけばよいのか考える機会になった」と発言している。これらの意見に反映されるように、職種や資格の有無を超えてそれぞれ有効な研修であったことが推察され、異職種間での意見交換は自分自身の認識の整理や新たな視点を取り切れることに有効に作用するといえる。さらに、支援策の方向性を探ることが極めて困難な高齢者虐待事例においても各種の機関との連携がスムーズになり、日頃の業務に有効に作用していったことが窺え、評価できる。これらの研修会を通じて、個人的なスキルアップや啓発にとどまるのではなく、最終的には「西区では・・・」と積極的な自分の意見としてネットワーク構築に向けての仕掛けづくりが確実になっていったと考えられる

2．市民向け民向け啓発研修の組み立て

キーコーディネーター研修シリーズと並行して市民向け研修を年度内に一回は開催して、広く市民に啓発活動を展開してきた。これは、地域の見守り活動は、専門職等の一部の人が熱心に取

り組んだとしても自ずと限界があり、安心できる地域を目指すには一人でも多くの人に地域のことを知ってもらい、地域のネットワークづくりに関心を持っていただくことが必要である。研修会を契機にして「西区高齢者ちょこっとネットワーク」を知ってもらい、その活動を支える人を着実に増やしていきたいという意図があった。

3年間に開催した研修テーマは、1年目は「知ることが関係を変える～認知症高齢者を支えるまちづくり～」と題して認知症問題を取り上げている。2年目は「認知症高齢者と家族を支えるために」と題してものわすれクリニックの医師の講演、3年目は、「高齢者が安心できるまち、西区を目指して～孤立死がちな高齢者のために、何ができますか～」と題して孤立死問題に先駆的に取り組んできた研究者の講演を企画した。

市民向け研修においても、さまざまな工夫が盛り込まれていた。すなわち、参加者の募集方法は研修会参加者を通じて口づてに勧誘するという方法をとっている。それには漠然とした興味や関心で参加をしてもらうことより、真にネットワークづくりに関心のある人に集まってもらい、さらにネットワークの輪を確実に広げたいという企画者側の意向が存在した。そしてその成果では、参加者は着実に増えていき、盛況な研修会となり、研修内容に対する評価もよいものになっていた。

3．西区が志向するネットワークづくり

「西区高齢者ちょこっとネットワーク研修会」の企画委員会が、ネットワーク構築の最終的な目標として位置づけてきたことは、在宅介護支援センターと研修会参加者が中心となった「見守り・早期発見ネットワーク」と、企画委員会と警察・消防等が加わった「専門職ネットワーク」の重層的なネットワークの構築である。見守りネットワーク構築の基本スタンスは、地域包括支援センターとの上下関係ではなく、パートナーシップをキーワードに着実な取り組みを進めていくという基本方針を貫いているということである。そして、地域包括支援センターの役割は、ネットワークが有機的に機能するように各校区の在宅介護支援センターのバックアップ体制をとることであり、ネットワーク形成に関しては決して主導権を握ることではなく、むしろ黒子的な存在を貫くことこそが地域包括支援センターの使命であろう。すなわち、西区の住民による、西区ならではの手作りのネットワークを目指すこと。それらのプロセスを着実に、丁寧にたどることによって「ちょこっとネットワーク」の基盤が着実に築かれつつあることが実感できた。特に最終年度は、全体の研究組織での企画が、西区では結局採用されないままで終わってしまったのであるが、主体を地域に置いた取り組みの実現を支持した結果であり、そのプロセスを最優先したことを研究者の一人として誇らしく感じている。

4．支援者用マニュアルの必要性

専門職用の見守り判断基準を作成することも大切ではあるが、専門職の役割が有効に機能するには、多くの非専門職の方々の気づきが前提として存在し、それがひいては早期発見につながっていく。非専門職の参加・協力が見守り活動の裾野を広げることに鑑み、気づきのマニュアル作成の必要性を強調したい。「西区内の高齢者を支える支援者」用のマニュアルの存在が大切であり、それも監視・管理を匂わせるマニュアルでないこと、温かさを感じさせる視点が盛り込まれたマ

ニュアルを必要としているのである。その内容には、地域包括支援センターに連絡をすることのきっかけになる、「何か気がかりである」と感じる気づきの視点が盛り込まれていることが大切である。項目数は、10 項目前後ぐらいが適当な数である。また、状況によっては項目には基本編から詳細編へと、観察の視点を段階的に設けておき、「気づき」からさらに観察と会話での確認へとつなげられることが求められる。その中には「うつ状態」「認知症」を疑う基本的・基礎的なサインが盛り込まれていることが大切である。

5，年度ごとのまとめと次年度に向けた目標設定

今年度は昨年度に引き続き研修会を継続し、併せて都市部での住民間のつながりの少ない地域での見守り担当者用の研修プログラムのあり方を検討してきた。これらの取り組みで大切なことは、当初の研修目的・目標を明確にして、活動の成果を確認・評価をしていくことである。確実で有効な研修成果をもたらすためには、この評価プロセスが重要であり、プロセスをたどることによって軌道の修正等も可能になる。

研修会の具体的な評価の進め方では、毎回の研修会ごとの評価と共に、年度ごとのまとめを年度の最終回に行ってきた。すなわち、当日の研修内容に関する感想・意見交換の他に、これまでの研修会で感じた事、学んだこと、これから望むことをグループワーク形式で話し合うセッションを組み込んだ。

見守り活動等の地域活動では、唯一の正解などが存在するわけではない。また、支援者の視点として、見守られる立場にいる当事者の思いを知り、できる限りその意向にそって支援を展開していくことの大切さを実体験の中で見つけていくことが大切であろう。その最も身近な習得方法として、自分の意見を表明すると共に、他の参加者の意見も知り、その意見の違いであったり、なぜそのように考えるのかなどの意見交換を通じて視点を広げていくことが可能となる。1 回ごとの評価の集積が 1 年間のまとめにつながり、さらに次の年度への目標へとつながっていくのである。なお、今回は 3 年間の研究成果の集大成として 3 年間の活動を DVD にまとめて振り返り、次年度の方向性を検討することにした。

6．まとめにかえて

地域見守りの視点としては、①高齢者や子ども、障害者など弱者に対する虐待の早期発見　②生活困窮や困りごとがあっても訴えることができない世帯の早期発見　③認知症のある徘徊高齢者に対する安否確認　④孤立死防止のための独居高齢者に対する安否確認　などの課題がある。見守り協力員や一般住民用の啓発としては、身近に関心を持ってもらうための具体的な方法として先進地域が取り組んでいるドラマチック・リリーフ体験（演劇活動）などが存在する。ドラマテック/リリーフ体験の企画については、啓発の有効な手法であると考え、西区高齢者ちょこっとネットワーク企画委員会に提案した。見守り支援者の主体性を尊重したあり方、考え方、価値観の共有は管内の相互サポートシステムの構築に役に立つと認識されたものの、結局は、地域包括支援センターおよび在宅介護支援センター再編問題を身近に控えた時期でもあり、新たな企画に取り組むことには抵抗があること、また、見守り基準に関する 3 年目の評価についても、民生委員を対象にした全市的なアンケート調査と重なり、関係者の混乱や負担を考え、いずれの企画も

断念せざるをえなかった。

地域のさまざまな情報収集作業を通して得られた課題の集約と、共有すべき課題をふまえた企画とその検討プロセスが大切であることを感じさせられた。経済的トラブルの早期発見やトラブル回避には、地域ぐるみの取り組みが必要であり、さまざまな利害関係や平等意識をふまえた都市部ならではの取り組みとしてはもう一工夫も二工夫も必要であったと反省している。

今後は、これら見守り活動を地域に啓発していくには校区内や町内会、そして西区でのより一層の主体性の確保と、併行してのボランティア等のマンパワー育成が必要である。それも「ちょこっとネットワーク」の名称にも表されているように自分の立場で、自分のできる範囲の、時、場所、に応じたちょこっと助ける意識の啓発が大切であり、行政としての取り組みとともに、そのような意識を根付かせるための市民啓発研修を今後も続けていくことが求められる。すなわち、新規の「ちょこっとネットワーク」人材の育成・確保としては、校区ごとの取り組みから、西区としての取り組みとへ発展・移行させていくことが大切なのである。また、西区は各種祭りなど歴史の継承にも関心が高いことを活かして、校区ごとの小単位での研修・啓発の機会を設けていくことが大切であり、そのことがひいては特性をふまえた有効な方法になると考える。今後は、学校等と連携しつつ、子どもボランティア育成・養成などにも着手していく必要性があろう。また、住民ボランティアの見守れる範囲と限界の存在は明らかであり、住民が必要以上の責任や負担を負うことなく、セルフネグレクト事例・世帯等の早期発見など、専門職に支えられながら協働して役割を遂行していく。そのことを通じて住民・参加者・ボランティア等の協力者も有用感・存在感を感じつつ、見守り人材数の育成と活動の活性化へと継続してつながっていくものと考えられる。それが、まさに「ちょこっとネットワーク」が目指す活動そのものである。

第５章　まとめ

1．3 年間の研修会のまとめ

堺市西区高齢者ちょこっとネットワーク研修会は、民生委員や介護保険事業者等の関係機関を中心に行ってきた“キーコーディネーターの養成研修”と、一般市民を対象にした“啓発研修”の 2 本立てで展開してきた。研修会のテーマや参加者数の概要は表 4 に示すとおりであり、足かけ 4 年間の研修への総参加者は、実人数では約 300 人であるが、延べ参加者数は 2,122 人にも上っている。

表 4　高齢者見守りネットワーク研修会の概要（平成 22 年 4 月～23 年 3 月末）

回数	テーマ・講師（所属）	参加者
	第一弾（平成 19 年 10 月～平成 20 年 12 月） **研修のテーマ：高齢者虐待防止ネットワークづくり**	
第 1 回 19/10/18	**「虐待の発見と予防」** 津村智恵子（甲南女子大学看護リハビリテーション学部　学部長）	82 名
第 2 回 19/12/12	**「危機的介入と介入段階」** 井上静江（大阪府立介護情報・研修センター　虐待防止相談員）	78 名
第 3 回 20/2/13	**「身体的虐待の実例と対処法」** 辻洋子（大阪医科大学法医学教室　非常勤教員・医師）	106 名
第 4 回 20/4/16	**「支援計画と連携」** パネリスト：警察、地域福祉課、保健センター、在宅介護支援センター、地域包括支援センターの各職員	73 名
第 5 回 20/6/19	**「成年後見制度の利用と高齢者虐待防止法について」** 上津亮次（東西法律事務所　弁護士）	90 名
第 6 回 20/8/28	**「閉じこもり高齢者への支援、ネットワーク構築へ向けて」** 臼井キミカ（大阪市立大学医学部看護学科　教授）	63 名
市民研修 20/10/29	**「知ることが関係を変える～認知症高齢者を支えるまちづくり～」** 臼井キミカ（大阪市立大学医学部看護学科　教授）	118 名
	第一弾参加者延べ人数	**610 名**
	第二弾（平成 21 年 1 月～平成 22 年 3 月） **研修のテーマ：高齢者見守りネットワークづくり** **～高齢者の特性を理解することから始める～**	
第 1 回 21/1/29	**「認知症当事者から支援者へのメッセージ」** 吉田民治（認知症当事者），吉田照美（介護者家族）	141 名
第 2 回 21/3/5	**「ネットワークをこうして作ろう！」** 久　隆浩（近畿大学理工学部社会環境工学科　教授）	143 名

市民研修 21/5/27	「認知症高齢者と家族を支えるために」 松本一生（松本診療所ものわすれクリニック院長　医師）	300 名
第 3 回 21/7/16	「高齢者が安心して暮らしている町に学ぶ」 清水好美・杉山美幸（泉南市地域包括支援センター職員） 藤田小夜子（泉南市砂川地区高齢者見守りネットワーク代表）	100 名
第 4 回 21/9/17	「私たちの町にネットワークをつくろう　パート 1」 佐瀬美恵子（甲南女子大学看護リハビリテーション学部　看護学科　准教授）	100 名
第 5 回 231/12/3	「私たちの町にネットワークをつくろう　パート 2」 佐瀬美恵子（甲南女子大学看護リハビリテーション学部　看護学科　准教授）	98 名
第 6 回 22/2/25	「セルフネグレクト(引きこもり)高齢者の早期発見・見守り組織のあり方」 津村智惠子（甲南女子大学看護リハビリテーション学部　学部長）	108 名
	第二弾参加者延べ人数	990 名
	第三弾（平成 22 年 4 月～平成 23 年 3 月） 研修のテーマ：高齢者見守りネットワークづくり ～高齢者に関する社会保障を知ろう～	
市民研修 22/9/9	「高齢者が安心できるまち、西区を目指して ～孤立しがちな高齢者のために、何ができますか～」 新井康友（中部学院大学　人間福祉学部　健康福祉学科　講師） シンポジスト： 岡原和弘（岡原クリニック・医師）、横尾将臣（メモリーズ(株)） 大島　泰（浜寺校区民生委員）、中原訓史（堺市西消防署） 渡辺隆一（堺市西区地域包括支援センター・社会福祉士）	280 名
第 1 回 22/11/25	「社会保障を知ろう　選択研修会　パート 1」	76 名
第 2 回 23/1/27	「社会保障を知ろう　選択研修会　パート 2」	86 名
第 3 回 23/3/24	「これまでの歩みを振り返って ～研修会を振り返り、西区のネットワークを考えよう～」	80 名
	第三弾参加者延べ人数	522 名
	総参加者延べ人数	2,122 名

2．「堺市西区高齢者ちょこっとネットワーク研修会の歩み（DVD）」

「堺市西区高齢者ちょこっとネットワーク研修会の歩み」は、堺市西区高齢者ちょこっとネットワーク企画委員・西地域包括支援センターが主催した足かけ 4 年の歩みを、35 分間の DVD としてコンパクトにまとめたものである。そのシナリオに沿って、活動を振り返ってみた。

1)はじめに

平成 18 年 4 月の介護保険制度の改正で　堺市西区の 6 つの在宅介護支援センターと、その年の 4 月に誕生した地域包括支援センターの職員は、今後の地域でのネットワークづくりについて悩んでいた。新しい制度や改正の中での戸惑い、どのように自分たちが動けば地域の高齢者や、高齢者を支える皆さまと一緒にネットワークが作っていけるのかが大きな課題であった。その時、メンバーの頭に共通して閃いたことは、西区のニーズの実態を把握すること、日々高齢者と接して活躍している事業者等の実態や感じていることを知ることに糸口があるはずとの確信であった。

そして、まず取り組んだことは民生委員へのニーズに関するアンケート調査であった。西区管内の全民生委員 134 名を対象にした自記式質問紙によるアンケート調査を実施した。調査は郵送法で行い、アンケートへの有効回答は 95 名（70.8%）であった。調査結果の概要は以下に示すとおりである。

調査結果：

1．関係機関との連携の必要性を感じていますか。　：感じている　80%

2．日々の活動の中で困っていることがありますか。：困っている　41%

困っている内容（上位第三位まで）：

①独居高齢者をどのように見守って行けばいいかわからない。

②役所や他の支援センターがどこまでしてくれるのかわからない（連携方法）。

③制度のことがわからない。

3．日々の民生委員の活動の中で困った時に相談するところがありますか。：はい　95%

その人は誰ですか。：先輩民生委員、各行政窓口や相談機関

4．高齢者虐待に関心がありますか。：興味がある　73%

2)調査結果からみえてきたこと

西区の民生委員を対象にした実態調査結果から見えてきたことでは以下の 3 点であった。

① 民生委員は独自の指針や高い意識を持って見守り活動を行っている。

② 活動では困っていることや課題もあるが、社会資源を利用して解決努力をしている。

③ 横の繋がりやマンパワーの充実を必要としている。

以上、民生委員は高齢者の見守りを継続していくには不安も多く、横の繋がりや、ボランティアなどのマンパワーの充実が必要だと感じていた。また、地域の課題は　①見守りネットワークの構築と、②ボランティアの養成等マンパワーの育成であることがわかった。

3)西区高齢者見守りネットワーク研修会開始への取り組み

そこで地域包括支援センターと在宅介護支援センターが一緒になって、ネットワーク準備委員会発足に着手した。

平成 19 年 6 月　ネットワーク準備委員会事務局が発足した。

事務局では以下のことを担うことになった。

①企画趣旨や企画内容の検討

②企画委員会の準備

③広報、案内、連絡調整などの事務管理

さらに、平成19年8月には企画委員会が発足した。企画委員会の役割・機能として以下のことを掲げた。

①企画内容の最終決定

②専門職ネットワークの基礎作り

4)高齢者見守りネットワーク研修会

以上のような準備期間を経て、平成19年10月から堺市西区初の高齢者見守りネットワーク研修会がスタートした。

研修会の目的は以下の3項目とした。

①参加者のスキルアップ

②顔の見える関係づくり

④ 門職と地域の住民との橋渡し

研修会の対象は医療機関、介護保険事業所、行政、社会福祉協議会　民生委員、ボランティア、自治会、校区福祉委員、在宅介護支援センター、地域包括支援センター等に所属する人とした。また、この研修はこれからのネットワークの中心となる人材の育成につながることを意識し、単発の研修会とは異なり、研修への継続参加が可能であることを参加の条件とした。また、1 回ごとの研修方法では、講演とグループワークを位置づけ、主体的に学び、日々の活動に活かせるような内容になるよう心がけた。研修の大まかなテーマは以下の3つであり、平成19年10月から足かけ4年間で、合計15回の研修会と3回の市民向け啓発研修を実施することができた。

第一弾：高齢者虐待の実際　(6回シリーズ＋市民向け研修1回)

第二弾：認知症高齢者見守りネットワーク　(6回シリーズ＋市民向け研修1回)

第三弾：社会資源･社会保障を知ろう　(3回シリーズ＋市民向け研修1回)

5)高齢者見守りネットワーク研修会の評価

研修会の評価を参加者へのインタビューから探ってみた。インタビュー対象者は6名（男性4名、女性2名）、インタビュアーは地域包括支援センター職員である。

インタビュー内容は以下の3項目であり、西区高齢者ちょこっとネットワーク研修会に対する正直な思いを自由に語っていただくことになった。

①「ちょこっとネットワーク研修会」に参加しての感想

②研修は日々の地域活動に活かせていますか。

③どんな西区になったらいいと思いますか。「ちょこっとネットワーク」の今後の課題。

（1）A氏（男性、所属：校区民生委員長）

①「ちょこっとネットワーク研修会」に参加しての感想

ちょこっとネットワーク研修会での最も印象深かったのは、実際に認知症を患った高齢者ご

本人と、その娘さんが出てこられたのが一番印象に残っている。その研修会には同一校区の自治会長が何人か参加しており、研修が終わってから「今後、認知症高齢者を地域としてどのようにとらえたらよいのか」について話し合った。結局、3 回ほど話し合いの会を持ったが、なかなか「こうしよう」という活発な意見は出てこなかった。研修会の感想としては、研修会に参加してよかったという思いと、地域で何もできなかったという残念さの 2 つが印象深く残っている。

②研修は日々の地域活動に活かせていますか

「ちょこっとネットワーク研修会」での研修内容は、児童民生委員の定例会の時に、その内容の概要を必ず報告してきた。また、民生委員活動への活かし方としては、「お元気ですか訪問」を継続しているが、訪問は月 1 回だけでなく、できるだけ頻繁に、ご本人の状況を判断しながら状況に合わせて訪問活動をしていこうと話し合ったことかなと思う。実践に「このように」役立っているとか、目に見えての具体的な効果までは残念ながらないと思う。各ジャンルに分かれての研修会、あの中で欲しかったのは、やっとお互いが話し合えるようになり、もっと各自が話し合える場や時間があったらと思った。お互い活かせる内容が出てきたかなと思っていたが、研修会の第三弾は終了し、来年度からは違う研修会になるとのことで残念である。6 つのジャンル（参加を希望する研修テーマ）の中でここに参加したいと自分で選んで継続して受けられるような研修がもっとあったらいいと思う。次回も研修に参加したいと思っていたから残念である。

③どんな西区になったらいいと思うか、「ちょこっとネットワーク」の今後の課題

どんな西区になったらいいと思うかについては、全国民生児童委員連合では「災害時に一人も見逃さない活動」を展開して 4 年経過しているが、昔なら「向こう三軒両隣」、隣りや向いの、あそこのおじいさんは・・・」などと色々なことを知っており、それでお互いが助け合っていた。災害時もしかり、平時でも高齢者に会った時、自然に声かけができるのが向こう三軒両隣の関係である。色々な形で声かけがあったらありがたいと思う。

民生委員は 2200 世帯、多い人では 2600 から 2700 世帯を担当している人もいる。とてもじゃないが見回りできない世帯数である。そんな中で　ちょこっとネットなどの人等が入っていただいて、地域で見守りができたら一番いいと思う。それは向こう三軒両隣の関係があればすぐできること、自治会組織でいうと班や隣組であろう。お互いが見守りできる状態になり、災害時も、平時も、関心を持ってもらえたらと思う。個人情報の保護や、プライバシーというのではなく、「今日は暑いね、寒いね」などと自然に、簡単に声をかけられるような関係、班であったら、地域全体のコミュニケーションが自然ととれるようになるのではないか。西区がそうなればいいと思う。

（2）B 氏（男性、所属：グループホーム）

①「ちょこっとネットワーク研修会」に参加しての感想

何かあった時にすぐ相談できる形の専門職のネットワーク、結びつきができて、収穫があったと思う。横の繋がりから活動の幅が拡げられ、困った時にはこの方に相談したらいいいと、顔が浮かぶようになった。人脈ができ、とても動きやすくなった。横の繋がりができ、活動がやりやすくなって活動の幅が広がり、１ランク、２ランク上の仕事ができるようになったことが「ちょこっとネットワーク研修会」に参加した成果だと思う。